

# 『蕭々十三年』について

繩 田 浩 介

〔はじめに——山本周五郎とキリスト教との関わり〕

山本周五郎の作品について、その相当数のものが、主題その他において宗教的な色彩に彩られているのを知るのである。しかもその宗教的な色彩というのが、キリスト教的、また聖書的であることを、これまでいくらかの指摘はなされているけれども、彼の作品と作者の精神を捉える一つの意義に有力に関わっているといわなければならないであろうと思われる。しかし、この場合宗教的色彩に彩られているといっても、キリスト教とか聖書とかに関わる作品ということになると、そしてまた、キリスト信仰の立場からすれば、「稍」とか「多分に」とかは許されるべくもないことであって、福音の根基によつての作品でなくてはならないのである。その時始めて作者はキリスト者であり、作品はキリスト教文学たりうると考えられるのである。

山本周五郎の場合、それはどうなっているのであろうか。的確に証明するためには、作者の信仰歴と作品個々それぞれに深い検討を加えねばならない。いまは、全域にわたることは措いて、特に『蕭々十三年』の聖書との関わりを探ってみることにしたい。さらにはそのための僅かな彼の背景探索に止めたい。

さて、木村久邇典氏は、『山本周五郎襟記』に、「墓所はこうしてめでたく建立されたが、その後の手当てはあまりよくなかったようだ。逸太郎<sup>注1</sup>が没したのは昭和九年である。このころ山本さんはすでに結婚して一家を構えて、新進作家としての地歩も固まりかかっていた時分である。山本さんには散文の仕事が四六時中、全身にフシかぶさっていて、菩提をとむらうゆとりなどは、まったくないような日が続いていた。それに山本さんは、周囲に飲み仲間、僧侶が数人おりながら、葬式仏教に墮落してしまった現代の仏教には、軽蔑の念さえ抱くようになっていた。ことに詭弁に終始する禅問答には、フレキシブルな思考方法に若干の長所は認められたが、人生にプラスするところは皆無にちかかろうとさえ考えた。宗教とも無縁に生きなければならぬ最大多数の人々に、散文で語りかけようというのが、かなり長い期間、山本さんを占めたテーマであった。そんな山本さんが、

故郷の墓地に背を向けてしまったのは、むしろ当然のことだったともいえる。(山本さんの作品に、宗教的な色彩がとみに加わるのは、昭和三十四年の『ちくしう谷』からである。)」とある。また「日曜学校で英語の讃美歌を習ったりしたのは、父の逸太郎がひそかなキリスト信者であった感化にもよるだろう」(『続山本周五郎襟記』木村久邇典)それに、「子供のころに、日曜学校にいったこともあるとかで、讃美歌なども、英語でうたっておりました。昔の教会は、日本語に翻訳した歌詞ではなくて、英語を教えたんだそうです。それを、そのまま、ずうっと覚えておりました。父の逸太郎もクリスチャンだったらしいということですから、そんなことで、教会へ通わされたのかもしれない。聖書なんか、晩年になって、たぶん、『ちくしう谷』なんかを書いたころ(昭和三十四年)だったと思いますが、読み返していたようです。」(『夫山本周五郎』清水きん)というような事実があり、また木村氏はその『襟記』に、「昭和三十四年の、夜気がつめたく感じられるほどふかい秋だった。山本さんはもうかなり酩酊している、車のなかで、それがおはこの、讃美歌『主よみもとに』や『また逢う日まで』などを大声でうたうのである。」と記している。これは、昭和三十四年のことではあるが、「おはこの、讃美歌」では、それまでの年季を推量せざるを得ないであろう。このことは、山本周五郎が生まれながらにある種のキリスト教的環境に置かれ、後年自らも聖書に接するようになっていた、ということであろう。ただこれだけの記事からだけで『キリスト教文学』であるとか、ないとかは、決定はできない。

未亡人の清水きん氏の『夫山本周五郎』の末尾に、木村久邇典氏の『山本周五郎小伝』が付けられているが、その中でも、「昭和三十四年に発表した『ちくしう谷』は、人間はどこまで人間をゆるしうるかの限界にいった意欲作でした。この作品のために、山本さんが「聖書」をあらためて読み直していたことが思いおこされます。

山本さんには、もともと宗教的傾斜を感じさせる作品が数多いのですが、『ちくしう谷』あたりから、晩年に向けていちだんとその傾斜度を増してゆきまし

た。

昭和三十八年の長編小説『さぶ』は、無償の奉仕をテーマとした友情物語です。こうした人間探求の最終点として山本さんが取り組んだのは、一行一行が神への問いかけとも思われる『おごそかな渇き』（昭和四十二年一月～二月「朝日新聞」日曜版―中絶）でした。」と述べられている。

これらの記事からは、キリスト教的乃至聖書の思量が目立って加わっているのは、時期としては、昭和三十四年四月の『ちくしょう谷』あたりからであって、その後晩年にかけていちだんと宗教的傾斜が増したということである。ところが、注意すべきは、「宗教的色彩がとみに加わるのは、昭和三十四年の『ちくしょう谷』から」というところである。すなわち、昭和三十四年の『ちくしょう谷』執筆のため『聖書』をあらためて読み直していた」ということは、早くから聖書に親しんでいたということであろう。また、『ちくしょう谷』より以前の作品についても、「もともと宗教的傾斜を感じさせる作品が数多い」と言っている。すなわち、その出生の環境から出発して、キリスト信仰というより聖書の論理をヒューマニスティックな道徳観として受容し、彼の内的性情の中に醗酵され、後日、作者自身の聖書への一層の近づきに、それも相変らず彼自身の個人的信条としての形で作品の倫理的テーマとして頑固に用いられていたものと思われる。山本周五郎のキリスト教観の深度も結局は信仰としての表われではなくて、聖書が倫理教科書として利用されていたのではなかったかと思量せられるのである。

しかし、昭和三十四年の『ちくしょう谷』執筆の頃から特に聖書の読み返しに つとめていたということ、そして、作品として『ちくしょう谷』では特にその「宗教的色彩がとみに加わった」ということは、記されているとおりである。ただ、山本周五郎の作品を取り扱うに当たって、特にその宗教性というか、キリスト教信仰との関わりにおいて見ようとするに際しては、彼がキリスト者であったか否か、正しく聖書・福音の理解が出来ていたか否かは、極めて重大な意味を孕んでいると見なければならぬ。彼の場合を大観すると、いかにもそれらしく、聖書理解においては相当度深いものがあつたのではなからうかと思われる。しかし、これは彼の人間の態度において聖書解釈が行われ、テーマに載せられているということになるのではないかと思われる。

このことは、彼の作品に載せられる人物や事柄が、全くキリスト教に関わりがない人と事とが対象となっている点、キリスト教文学と銘うちがたいものがある

ように思われる。そのような対象のとり上げ方しかなかったことは、キリスト信仰者が描写対象になっている作品ではなくて、弱い大衆、むしろ宗教そのものには直接関わりのない人たちにも直かに容易に受容されるものとしてその作品を構成することを考えていたこと、そして、テーマそのものが極めて明快にわかり易い形で形成されなければならなかったという点、聖書からの信条が、その本来の福音として受容されていないし、人間の罪と救贖が作者と神（キリスト・聖霊）との出会いにおいて描かれる形をとっていると考えられないこと、したがって、登場人物にそれが形象的に表現されていないことによつて、少なくともキリスト教文学の範疇には入りえないということになる。それにも拘わらず、なお、山本周五郎は、その信仰度合は別として、生れながらにキリスト教的環境にあつたことと、それに周五郎自身の性格に多分にキリスト教的倫理の受容を容易にする「庶民のために」<sup>注4</sup>とか、「しいたげられた者への同情」<sup>注4</sup>とか、「正義感」とか、さらにまた、「生きていく時になにをしたかではなく、なにをしようとしたか」<sup>注5</sup>、自己絶対観を排して「無償の奉仕」に取り組もうとしたり、その作家業績に対する数多くの受賞を断つたり等々を重大に考えようとしている彼の性格が、聖書から抽出できる倫理感とうまく適合した<sup>注7</sup>ということであろう。

そこで、山本周五郎の作品の多くに認められるキリスト教（聖書）的傾斜、すなわち、彼が聖書から借用したにちがいない倫理観が、キリスト教文学ということとは全く別な形で、どのように彼の作品に埋め込まれているのか、むしろ読者にそれと気付かせずに、しかも強烈に、たとえば人間の正義の血を燃えさせたぎらせるやり方が、どのように組み込まれているか、いま仮りに『蕭々十三年』（一九四二年―昭和十七年）をとり上げて、解明を試みようと思う。

注1 「逸太郎」は、周五郎の実父。

注2 「人生にプラスするところ」が、宗教に求められて、然るべきか否かについては諸見解があるが、木村久邇典氏の言われるところは、周五郎に徴すれば、人間的倫理に関わるものではなからうか。周五郎の性格的テーマとして示されているものそれである。とすれば、純粹信仰における事態とは、稍別の所に置かれているものといわざるをえない。

注3 「宗教的傾斜を感じさせる作品」例。

一九四二（昭和十七）年。

- ・蕭々十三年 主題 無償の奉仕。
- ・松の花 〃 〃
- ・青竹 〃 〃
- 一九四三(昭和十八)年。
- ・薯粥 〃 〃
- ・殉死 〃 〃
- 一九四四(昭和十九)年。
- ・石ころ 〃 〃
- ・御馬印拝借 〃 〃
- ・紅梅月毛 〃 〃
- ・兵法者 〃 〃
- ・荒法師 〃 〃
- ・水の下石 〃 〃
- 一九五一(昭和二十六)年。
- ・雨あがる 〃 〃
- 一九五四(昭和二十九)年。
- ・大納言狐 〃 偽善。
- 一九五五(昭和三十)年。
- ・かあちゃん 主題 無償の奉仕。
- ・裏の木戸はあいている 主題 人間愛。
- 一九五七(昭和三十二)年。
- ・深川安楽亭 〃 無償の奉仕。
- 一九五八(昭和三十三年)年。
- ・赤ひげ診療譚 〃 〃
- 一九五九(昭和三十四)年。
- ・ちくしょう谷 〃 宥し。
- ・五瓣の椿 〃 罪と裁き。
- 一九六三(昭和三十八)年。
- ・さぶ 〃 無償の奉仕。
- 一九六四(昭和三十九)年。
- ・ひとごころし 〃 〃

一九六七(昭和四十二年)年。

・おごそかな湯き〃 未完作品だが、「神への信頼」を予想。

注4

①庶民とともにあって、弱く取り残された「庶民のなげき、かなしみ、よろこびを深い共感をもって綴」(『襟記』)り、多くの賞を固辞した心、「人間という生きものの哀れさに対する無限の慟哭」(全前)こそが彼の作品の底流であるという諸家の評も、その裏をかえせば、彼の真意はそのような人々と共にあって、その『重荷を負い合』(ガラテヤ人への手紙六・二)うということであつたと思われる。

②「下級武士や庶民層に仮託して、本質的には、私小説を描いたのである。私小説の基本は英雄小説ではないところにあるという中村光夫の説にしたがえば、山本さんは、まさに政治や経済とは切離されたところで押しひしげられながら生きていく最大多数の庶民のなげき、かなしみ、よろこびを深い共感をもって綴つたのだつた。山本さんの作品に英雄豪傑がきわめて少ないのは、そのゆえである。」(『山本周五郎襟記』木村久邇典)

③「山本さんのところは、つねに庶民の側にあり、そしてつねに不羈独立の精神にみちていた。直木賞、文春愛読者賞、毎日出版文化賞その他いっさいの受賞を固辞したのも、数度の総理大臣招待の園遊会へ姿をみせることがなかったのも、すべて〃散文を書く〃ことは無関係だと考えたからであつた。」(全前)

④「石塚友二氏はいふ。『山本さんの作品の底を流れているものを、私流に汲取って表白するならば、それは、人間という生きものの哀れさに対する無限の慟哭である。殊にも、日蔭に生きる運命に対する慟哭の熱さである。』」(全前)

⑤「『山本周五郎の孤絶感は、劣等意識から出たものであり、その復讐が作品という形をとらせているように考えられもする。この事が世の多くの志を得ない人たちのなぐさめになっている』と和田芳恵氏は評しました。まことに山本さんの文学の大きな魅力の一つは、きびしい反権力の姿勢で、失意の淵に沈む志を得ない人々に、生きる希望を語りかけるところにあると申せましょう。」(『続山本周五郎襟記』木村久邇典)

◎このような評言の中に潜む心を聖書によって抽出すれば、

『互に重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであらう。』(ガラテヤ人への手紙六・2)

というところである。

注5 「過去を語って思い出に生きる——という後向きの姿勢を、山本さんは原則的に拒絶した。現実を踏まえて未来を拓こうという前向きの姿勢に終始したいというのである。人間はなにを為したかではなくて、なにを為そうとしたかだ。ロングフェロウの詩句だというこの言葉を、山本さんは口ぐせのように、若い人たち々に聞かせたものであった。」（『山本周五郎襟記』木村久邇典）

注6 注4の①項を参照。

〔『蕭々十三年』と『聖書』との関わりについて〕

『蕭々十三年』は、昭和十七年一月『新国民』に発表された作品である。『ちくしょう谷』の発表された昭和三十四年からは十七年以上も昔の作品である。この『蕭々十三年』の字面には、『おごそかな渴き』のような聖書の言辭は何ものも見られない。登場人物のただの一人にもそれらしい表白は付けられていない。しかし、周五郎の独特なテーマの一つとも言われている『無償の奉仕』が、『水の下石』（一九四四―昭和十九年―）などと全く同じように、この作品でも極めて明瞭に描かれており、無償の奉仕のキリスト教的真実を作者は下敷にもちながら描いていたにちがいないことは、強烈に響いてくる。

しかし、ここでこの作品の蔭に脈うっているもう一つの活々とした心は見逃せない。それは、主人公半九郎が真実の無償の奉仕に立ち至るための極めて大きい契機となっているのは、それまでの自己絶対観を去るについて、自己の無力を知ることの原動力は、『互いに重荷を負い合う』（ガラテヤ六・2）ことの重大さ・

『蕭々十三年』の構成について一覽表

章段	要 旨	時 場 所	出来事	水野 監物 忠善	天野 半九郎	聖 書
1	江戸大火に際し、明暦三年正月、桜田門で馬の口取り争い。	大火江戸城へ迫る。馬の口取り争い。	忠善、馬を乗りつける。	「いやその口取りは拙者が承る」けんめいに相手をつきのけようとした。	「もうよい、弥五郎が先についたのだ、口取りは弥五郎でよいぞ」と制した。	・マタイ 23・27～28

大切さを教えられ、また覚るところにあることである。<sup>注7</sup>

だが、何といってもこの作者の一つの強烈な特色というべきであろうと思われるのは、極めて計画的に緻密で明確な構成をもっていることである。たとえば、『虚空遍歴』の解説の中に、山本周五郎の創作態度について、木村久邇典氏が次のように述べておられる。「……おそらく小説家として生れたらろう。業々ともいえる表現願望を、作者はきつとこらえて、爆発へまで高まる時間を、決してあせることなく、粘りづよくまつのである。待つというのは、消極的にただ待つのではない。時間をかけて、ためつすがめつ、といったあんばいに、メモを書き足し、書き足してデッサンを確実なものにしてゆき、そして完全に熟成しきつたと判断したときに、作者ははじめて筆をとるのだ。数十年まえる感動は、衝動的なその場かぎりのひとりよがりではなくて、より多くのひとびとに訴える力をもつ客観的な感動として醸成されている」（『山本周五郎襟記』）  
 といい、また、「山本氏は、最初の一行を思いついただけで筆を執ったりするハナレワザは演じない。最後の一行まで、口でそらんじることができるようまで練りきたえ、しかもこれだけではどうしても書かずにはおられない、というギリギリのところまで圧搾しなければ、原稿紙に筆はおろさない。ここまでくれば一種の生命の危機感であり、生命の最高に充実した燃焼だといってもいい。」（空前）このような小説作法上の態度が、たとえば、構成だけについても一つ一つの作品の構成に心を尽し、日時がかけられて、極めて緻密に明確に作り上げられてゆき、読者にわかり易く印象を鮮明に深い感動をもつて迫る作品に仕上げているのである。<sup>注8</sup>このことをはつきり捉えるために、『蕭々十三年』をとり上げて検討を加えてみようと思う。まず、その構成を次のように図表化して要点を捉えてみる

<p>2 承 国表岡崎での主君 に対する早朝より の忠勤。</p>		<p>その年の秋（江戸屋敷）</p>	<p>半九郎に岡崎 転勤命令。</p>	<p>半九郎に岡崎転勤を命じた。 「食祿を五十石加算する」覚えていると 申したあの時の褒美だ」と云って笑った。 泣いた。</p>	<p>憤然と忠善をふり仰ぎ「殿！おぼえて御 座あれ！」 ・夢中、主君の供がしたいという一念 でとりみだしていた。 ・あつと思った。とりかえしのつかぬ 失策である。冷汗。「殿のおんため」 という一念に凝り固まっていた。</p>	<p>。マタイ5・3〜10 。ルカ10・38〜42</p>
<p>① 忠善帰国の 翌る朝</p>	<p>その翌年 （明暦四年）岡崎 一月</p>	<p>城中</p>	<p>洗面</p>	<p>「六ツまでは、起きてまいるには及ばぬ ぞ」 〈禪に精しく、儒学によく通じていた。 ……兵学見識・弓・馬・一刀流・侍 女なし〉 「盥の湯気、程よいぬるま湯」 ちらと半九郎を見たが、なにも云わずに 顔を洗ってしまった。 短袴をつけて馬場へおりた。 「だいぶ精がでるな」</p>	<p>殿の洗面準備。 ・殿は、自分の心を知ってくだすった。 ・この主君のために死のうとあらため て心に誓った。 ・勇んで国許へ。</p>	
<p>② 翌る朝</p>	<p>城中</p>	<p>馬場</p>	<p>洗面 乗馬</p>	<p>「肩が凝るぞ」 ・低く笑いながら、馬を駆って馬場へ 出て行った。 黙って洗面した。 ・終ってからしずかにふりかえって云 った。 「余は少年のころから、顔を洗うのに湯 をつかったことがない、……」</p>	<p>既の前に乗馬を曳きだして待っていた。 「……はっ」 ・なにか溢れるような眼で彼は主君を 見上げた。 湯を汲んで待っていた。</p>	

<p>3 転 お役御免についてそれから間 の半九郎の疑義もなく と、忠善による奉 公の真義の解明。</p>	<p>③ その翌る朝</p>
<p>半九郎とつぜ ん役目を解か れた。</p>	<p>馬場 乗馬 城外 (矢矧川) 遠乗 下 暁暗の廊洗面</p>
<p>なにも云わずにそれを使った。</p>	<p>「また岡崎にいるあいだは身のまわり一 切のことを自分ですることにしている、 それで宿直の者も六つまでは起きなくとも よい定なのだ、これからは湯を汲んで 待つには及ばないぞ」 「叱ったのではない、気にいたすな」 「へそういうときは必ず独りにきまっ ていた」 「来なくともよい、早朝はいつも独りで 乗るのだ、戻っておれ」 「来なくともよいぞ」(二度まで云った が……)</p>
<p>「お目通りおゆるしが願えませんでし ょうか、……」 (老職「仔細に就いてはなんのお沙汰 もない」) 「お目通りおゆるしが願えませんでし ょうか、……御役御免の御趣意をぜひ申し 聞かせて頂きたく存じまするが」 「……精いっぱい主君に仕えて来た。―― どこが悪かったのだろう。……いろいろ 考えてみたけれど、どうしても自分では 思い当ることがない。」</p>	<p>「独り合点に心付かぬことを仕りました。 以後は必ず御意にそよう致します」 早くも厩から乗馬を曳きだして待って いた。 (城門を出ると間もなく)馬で追って来 た。 「はっ」手綱を絞った。 すこし遠のくだけでしまいまで供をしつ づけた。 洗面の用意をしていた、(湯ではなかつ たが、井戸から汲みだて……)</p>

十余日後、  
未明  
矢矧川の堤

「黙れ半九郎、黙れ」  
かつてみたことのない忿怒の拳をあげて、半九郎の高頬をはっしと打った。二度、三度、五たび、そして力任せに突き伏せながら「そちは余をそれほどの愚者と思うか」

「他人の讒訴によって家来を誤り視るほど余を愚者だと思うか、そちは今ひと筋の奉公と申した、……そちはいつも己れいちにんの奉公、他を凌いでも己れだけ奉公すればよいと考えている、桜田御門の折もそうだ、先にとりついた弥五郎を押しつけても己れが供をしようとする、宿直に当れば定を越えて盟を運び、馬場の世話をす、これらはいかにも出精で、奉公無二にはちがいない、余にもそれはよくわかる、うれしく思う、だが、家来はそちいちにんではないぞ、そちだけが無二の奉公をしてほかの者はどうするのだ……」

「戦場に於て最も戒むべきを『ぬけ駆けの功名』とする、いちにんぬけ駆けをす

——そうだ、誰かの讒訴にちがいない。  
・再三、お目通りを願ひ出た。……目通りの許しはなかった。  
・直訴をする決心をしたのだ。  
「……先般お役御免のお達しを蒙りましたが、……いかなる疎忽に依って御意を損じましたるや、……合点のまいらぬ……」  
「……ただひと筋に御奉公を心がけてまいりました、……もしや誰人か殿に言上することなどあって、御意に触れたのではないかとも思われ……」

・息が止るかと思つた。高頬を打った拳は骨に徹するものだった、しかしいま忠善の口を衝いて出る言葉は、彼の全身を微塵に砕くかと思われた。

<p>結 4  身をもって扉の隙の間寛文十年八月二十五日は岡崎への延焼・爆発を防いだ男を確認できないまま翌年十一月、忠善は霜の深い矢矧川堤で遠乗りのさ中にその男こそ半九郎だと光りの閃くようにその名が思いうかんだ。蕭々たる十年のとしつきを経てふたたび主従の心はあい寄ったのである。</p>	
<p>翌日</p>	
<p>〈第二の使者〉</p>	
<p>白山曲輪を炎上させた報告。(煙硝蔵引火を未然に防いだこと)  〈第一の使者〉  「では焼けてしまったのか」  へ「危うく火を引くところでしたが、まことに奇特のことがあって辛くも防ぐことができました」  へ「……おのれの身を以て扉の隙を塞いだのでございました」  「即妙の知恵だな、なに者だ」  へ「それがなに者ともあいわかりません、火がおさまって駆けつけましたときは、全身まったく黒焦げとなっておりました、衣類はもとより、人相も見分けのつかぬ死にざまでした」  「」  (なお、種々手を尽し、心を傾けてもその人の確認は出来なかった)</p>	<p>れば全軍の統制がみだれるからだ、平時にあってもこれに変わりはない、家中全部が同じ心になり互いに協力して奉公すればこそ家も保つが、もしおのおの我執にとらわれ、自分いちにん主人の気に入ろうとつとめるようなれば、やがては寵の争奪となり、五万石の家は闇となってしまふ、……そちの奉公ぶりは戦場に於けるぬけ駆けと同様だ、役を解いたのはそこに気付けさせるためだったが、おのれの至らぬことは考えもせず、他人の讒訴を思うなどは見下げはてたやつだ、さような者は余の家臣ではない、いとまを遣わすから何処へでも出てゆけ！」</p>
<p>マルコ 8・34〜38</p>	<p>・両手に霜凍る土を掴み肺腑を絞るような声で彼は泣いた。  ガ  ラ  テ  ヤ  6・1〜5  (マタイ 5・4)  (マタイ 5・43〜48)  (ローマ 12・3〜21)  (ローマ 15・1〜6)  (ガラテヤ 5・13〜15)</p>
<p>マタイ 6・25〜34</p>	<p>(コリント 1・2・1〜5)</p>

一日おいて  
 寛文十一年岡崎、矢矧  
 十一月、あ川の堤  
 る朝

〈第三の使者〉

・それでもその死者の正躰はわからず  
 じま이었다。

・堤へかかって三丁あまり来たときだ  
 った、忠善はとつぜん烈しく手綱を絞  
 って馬を停めた。

「半九郎」

・光りの閃くようにその名が思いうか  
 んだのである、

「ああ」

・と忠善は息をのんだ。十三年まえの  
 或る朝、その堤の上で、しかもいま忠  
 善が馬を停めたその道の上に、半九郎  
 が平伏していた。……

「……そちだったのか、そうか、よくや  
 った、よくぞ城を護ってくれた、十三年  
 のあいだ、待っていたのだな半九郎、あ  
 っぱれだ、あっぱれだぞ」

・涙が忠善の頬をながれた。蕭々たる  
 十三年のとしつきを経て、ふたたび主  
 従の心はい寄ったのである。

ルカ6・27〜36

この作品で、まず目にたつのは、この作品が四章構成になつてゐることであ  
 る。この四章は事件の推移に従つて明確に、所謂「起・承・転・結」に組みたて  
 られている。このように形の上で整然と構成されているものとしては、この人の  
 整つた作品の中でも特に典型的なものといえよう。さて、この「起・承・転・  
 結」の構成が、どのような意味や内容をもつて細部の構成がすめられ、どのよ  
 うな効果に關つてゐるか、図表の把握にしたがつて触れてゆくこととする。

第一章(起)は、江戸大火に際し、桜田門での馬の口取り争ひのことであるが、

これが発端ということである。すなわち、明暦三年正月十九日、江戸大火は江戸  
 城へ迫つて来た。桜田門に駈けつけた水野監物忠善はまかり通ると名を通じた  
 が、「ひじょうの場合、家来はいならぬ」と押しとめられ、結局「片口で」と  
 いうことになった。その途端に、いきなり「弥五郎口取りをつかまつる」ととび  
 だして馬の口へとりついた。ほとんど同時に、「いやその口取りは拙者が承る」  
 ととびだして来たのが半九郎であった。忠善は、即座に後手の半九郎を制し、弥

五郎でよいと裁いた。この時、半九郎は憤然と忠善をふり仰ぎ、「殿！おぼえて  
 御座あれ！」と絶叫した。しかし、主君に向かつてのこの失言に立竦む。だが、  
 「夢中だったのである、主君の供がしたいという一念でとりみだしていたのちに  
 がない。」と作者は解説する。彼は、常住坐臥、『殿のおんため』という一念  
 に凝り固まっていたのである。このいわば失言が因で、半九郎は岡崎転勤を命じ  
 られ、食祿五十石加算の沙汰が付加され、「覚えていると申したあの時の褒美  
 だ」とする。

ここで、第二章(承)に移る。

「思いがけない沙汰」によつて、半九郎は、「——殿は、自分の心を知ってく  
 だすつた。」と、泣いてよろこび、勇んで国許へ移つて行つた。半九郎は、相変  
 らずの「殿のおんため」一途の心で、国表岡崎での主君に対する忠勤ぶりであ  
 る。すなわち、待ちに待つた主君忠善のお国入りがあるや、半九郎は早速に寒い  
 早朝、主君のために細かい心配りで洗面の準備(忠善の説明で湯から汲みたての

水に変化してゆく)、続いて乗馬のため馬の準備、遠乗りの供を、それぞれ三度(第三朝には洗面のことだけになっていて)奉仕の場面が繰り返されている。その三度の回を重ねるにつれて、奉仕無用のこと、それがしきたりであることを忠善から聞かされる半九郎ではあるが、決してあっさりとは奉仕を止めなかった。第三日目は、洗面の用意についてだけが描かれているが、この最後の時と場面では、忠善は、「なにも言わずにそれを使った」で終わっている。

この第一・二章の起・承の部分を通して、半九郎は、「殿のおんため」という一念で、奉公一途に働いているわけである。しかし、「殿のおんため」「主君の供がしたいという一心」からの半九郎の姿は、誰から見ても「いかにも出精で、奉公無二」の姿として描かれている。だが、この半九郎の心の真相は、第一章で馬の口取りの場合に見られるのは、後れてとびつきながら弥五郎をつきのけようとしているのであって、他人を押しつけても自分だけは、という考えの奉公心であって、自分の奉公以外にはないのである。彼の目には、殿への一辺倒であって、周囲に注がれるべき視線は全くなかったのである。これは全くの独善であり、自己絶対観のほかはなかったのである。この心が「殿!おぼえて御座あれ!」という絶叫にもなったものであり、「しまった。しまった。とりかえしのつかぬ失策である、彼は全身に冷汗をにじませながら立竦んでいた。」のも、ただ主君と家来という身分の差の上に乗れなかった失言として響いただけであって、決して彼が真実を知っての反省ではなかったのである。このことは、第一章末の「食祿を五十石加算」の沙汰に対して、半九郎はまず泣いた。忠善の心中の意味はいまは措くとして、半九郎の受けとり方が、泣いてよろこんでいる点、そして、第二章の冒頭に、「――殿は、自分の心を知ってくだすった。」と喜び、「自分の心を主君は見ぬいてくれた」と解しているところに、すでに見えている。これはまず発端の重要点であるが、第三章の(転)へも重大な伏線の関りをもっている。このところの考察には、「山上の垂訓」(マタイ五・3〜10)にその真義を見るのである。すなわち、『このころの貧しい人たちは、さいわいである。』(マタイ五・3)は、「自分が全く無力であることを知って、ただひたすら神により頼む人はさいわいである。」(聖書註解シリーズ、ウイリアム・バークレー以下「バークレー」と略記)また、「神のみ心を行うことができるのは、自分が全く無力であり、全く無知であり、人生を生きるのに全く無能であることを知って、ただひたすらに神により頼むときである。信頼してこそ服従がある。神の国は心の貧しい者が所有する。何故なら、心の貧しい者とは、神無しに

は、一ときも生きられないことを自覚して、神に頼り、神に従うことを学んだ人のことだからである。」(全前)自己絶対観の人というのは、こういう「このころの貧しい人」と正反対に位置する人なのである。また、『柔和な人たちは、さいわいである』(マタイ五・5)について、「この至福の教えは、まずつぎのように記すことができる。

(バークレー)

と。「自分に加えられた侮辱や損害に対して怒ってはならない。すなわち、クリスチャンは恨んではならない、ということである。しかし、他人が傷つけられた時には怒らなければならない場合がしばしばある。自分中心の怒りは罪であるが、自我を滅した怒りは、この世の偉大な道徳の力である。」(全前)また、次のような訳も可能であるとしている。

「すべての本能、衝動、激情を抑制することのできる人はさいわいである。完全に自制できる人はさいわいである。」(全前)

と。すなわち、「さいわいなのは自分で自分を支配する人ではない。完全な自制などは人間にできることではない。さいわいなのは、むしろ神に支配された人である。神につかえる時にのみわれわれは完全な自由を見出し、神のみこころを行うときにのみ、平和を得ることができからである。」(全前)しかし、半九郎には、自制など不可能であったし、神に依ることなど勿論ありえないことである。いかに忠善が半九郎の自覚を期待して、その間違いを暗示しても、半九郎の心中には「自己絶対」の思いで充満していたのである。「殿のおんため」精一杯につとめているのである。「俺でなくては。俺がいちばんにつとめるんだ。」という、この心のほかに忠善の教示を受容する余地がなかったのである。さらにまた、『あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。』(マタイ五・7)は、「多くの人は自分の気持ばかりを大切に、ほかの人の気持を考えない。それで『気の毒に思う』と言っても、それは外側からのことで、他人の心や胸の中に入って、相手の立場に立つて考えたり、感じたりしようという努力を払おうとしない。」(バークレー)という、このような自分中心で、他人の気持を考えない親切の間違いを犯すことがはなはだ多いのであるが、半九郎の奉仕にはこの過ちが潜在していたものである。すなわち、『あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。このようにあなたがたも、外側は人に正し

く見えるが、内側は偽善と不法とでいっぱいである。<sup>注10</sup>』(マタイ二十三・27) 28) 半九郎に自覚されておられない内側の偽善が、主君忠善の心に噛み合わない、自己絶対観を振り払うことのできないものがあったのである。

たとえば、『武家草鞋』でも同じ精神の姿が認められるのである。主人公宗方伝三郎は、自分だけが義しいとする正義感から主家を浪々してしまおうのである。そして、俗世間とは離れたような袋井の山家に身を寄せて、所謂「武家草鞋」をつくるが、余りに丈夫で評判はよいが、問屋からは、もっと多く売れるためにはもっと弱いのを作れといわれ、道普請の土方になつては、働きすぎる、休み時間はちつとずつでもよけい休めと同じ土方仲間からいわれる。林で山葡萄の蔓へ手を伸ばせば、山を荒すじやないと百姓の娘に嗷鳴られる。ここでも汚れはてた世間、卑賤で欺瞞に充ちていて住める処でない、と出ようとすると、宿の主人に、「あなたは家中が悪い。世間も卑しいとおっしゃるが、ひと言もおのれが悪いということとは仰しやらぬようだ。」と指摘され、始めて、人に求め、自らの責を忘れていた過誤、見えざる真実が世の中の楔になってゆくことを教えられ、自分の欠点を自覚するのである。『蕭々十三年』に表現されたものと全く同じ精神が見られるのである。

さて、第一章を承けて第二章では第三章の大転換へ、対忠善の、半九郎の自己絶対観的行為を執拗に強めている。すなわち、第一章末尾で、岡崎転勤に付加して「覚えていろと申したあの時の褒美だ」といって「食祿を五十石加算」されたことについても、半九郎は、真実の奉公を悟るにはほど遠い認識状況であったし、忠善のことばの真意も理解は出来なかつた。それが第二章冒頭の「殿は自分の心を知ってください」ということばに表白されているわけである。忠善は、半九郎の心など勿論立派に知り尽くしているわけだが、半九郎の認識は全く別である。半九郎の認識は、ここでも全く自己流・自己中心に殿の理解を判断しているに過ぎない。いよいよますます自己絶対観は堅固にかたまってきたわけである。これが、第三章の「転」をいよいよ効果的にしているのである。試みに忠善の心情変化を辿って見る。

第二章において、忠善の帰国第一日目のところでは、半九郎の早朝からの奉仕に對して、「六ツまでは、起きてまいるには及ばぬぞ」では、まずは単純に半九郎の不知に對する教えから始まって、「ちらと半九郎を見たが、なにも云わずに顔を洗ってしまった」。そして、馬を曳き出して待っていた半九郎に對して、「だいぶ精がでるな」は、稍皮肉であろうが、「肩が凝るぞ」というのは、それ

よりも直截な嫌味になっている。第二日目では、洗面用意に對して、前日より遙かに詳しく明確に説明を与えている。読者の受けとりは当然常識的には、ここで半九郎の朝の早起奉仕は止むにちがいないと思われよう筆は運ばれている。それにも拘らず、半九郎は馬の用意にかかわっており、次いで、矢矧川堤への遠出にも従うのである。これには、「来なくともよい……戻っておれ」と重ね、さらに「来なくともよいぞ」と二度まで忠善のことばが、曇みかけるような形で、忠善の心中の昂進が表現されている。第三日目では、洗面の場面だけになっている。「なにも云わずにそれを使った」というのも第一日と同じことばながら、その感情表現は全く昂進の極に至っている筈である。これが、第三章の突然に役目を解かれる出来事から他へ疑いを寄せ讒訴に思いを屈して、遂に、忠善からの解き明かしと追放という「転」への効果は極めて大きいのである。このように主君忠善を筋の進行の契機に用いながら、主人公半九郎の結末に至るまでの、「殿のおんため」一途の奉公の意味を十分明確に表出、読者に刻明に植えつける働きを付与できているのである。

第三章(転)に入ると、第二章末の第三日目の朝の用意された盥の水に向つて(この時は、さすがに「湯ではなかつたが、井戸から汲みだての、湯気の立つような新しい水だった」)「……忠善はなにも云わずにそれを使った」ということばに對し、「それから間もなく天野半九郎はとつぜん役目を解かれた。」で始まっている。すなわち、第二章まで、主君忠善の教示にも拘らず、真の奉公の意味を覺らず、真の奉公の出来ない半九郎の独善と自己絶対観は、突然のお役御免の意味(理由)が理解できない。だから「精いっぱい主君に仕えて来た。——どこが悪かつたのだから。」となるのである。したがって、老職を通してお目通りを願う。それが聞かれなくて直訴ということになるのである。このあたりまでは、筋の上では、「お役御免」という大きい転換は始まっているが、主人公半九郎の精神(心理)状態は、第一・二章の極致という形になつていても、向きは變つていないといえよう。しかもこれは、第三章の主たる要点ではなく、「お役御免」の意味がわからないで、直訴に至るところは、この章の要点である主君忠善の解き明かしと半九郎追放を引き出すための契機として構成されているだけである。にも拘らず、聖書の意義において、十二分に要点に至る筋道を証している。『お役御免』が「いかなる疎忽に依」つてなのかわからない。「ただひと筋に御奉公を心がけてまいりました」とすれば、「もしや誰か殿に言上することなどあって」ではなからうか、となつたのである。自分は間違はなく立派に奉公してい

たのに、『お役御免』とは『讒訴』よりほかなさそうだ、というわけである。忠善にしてみれば、すでに当初から半九郎の「殿のおんため」「奉公一筋」「奉公無二」の過誤を捉えていて、作品の始めからこの過誤を正し、忍耐深く教示してきた。それが半九郎には、一向に通じないのである。このように通じない者がどう扱われればよいのであろうか。「讒訴」をまで、すなわち、他に間違いを求め自らに過誤を思ふことのない半九郎に対し、忠善は総てを解き明かし、救い難い半九郎に対し、追放の宣言をしたのである。ここで想起されるのは、『自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。』（マタイ六・1）である。「人間の生活の中で一番立派なことが、しばしば間違った動機でなされる」（パークレー）ことがある。「自分の栄光のために、これらの善行を行う者は、その価値の大半を失なってしまうのだ、と。」（全前）すなわち、第一・二章での半九郎の「殿のおんため」「奉公専一」は、まさに立派なことであるが、その中味なり動機には問題乃至間違いがあつたわけで、それを正そうと心を尽すのが主君忠善なのである。しかし、遂に半九郎は自覚に至らず、立派な奉公もその「価値の大半を失なつて」「お役御免」とならざるを得なかつたわけである。第三章では、さらに自覚どころではなくて、『お役御免』のおもいやりの真意をすら察することができなくて、主君忠善に直訴に及び、拳句には、『讒訴』の疑いすら心中に生じて、半九郎の間違ひ（罪）はさらに深まつてしまい、遂に追放に至るわけである。

この「讒訴」の疑いから直訴に及ぶところで、主君忠善の半九郎に対する怒りの解き明しが行われるわけであるが、この第三章での真の奉公と半九郎の奉公との差異を徹底的に解き明かす忠善のことばには、深い含蓄があるように思われる。ガラテヤ人への手紙に、『愛をもって互いに仕えなさい』（ガラテヤ・五・13）とあり、続いて『気をつけるがよい。もし互にかみ合い、食い合っているなら、あなたがたは互に滅ぼされてしまうだろう。』（全前・15）とある。「自由は、それだけでは利己主義に転化する危険がある。自由を、単に自己の自由という見地からだけ考えるなら、それは『互にかみ合い、食い合つて』、『互に滅ぼされてしまう』結果になるであろう。自己の自由と同様に他者の自由も重んじられねばならない。ここに自由と並んで愛による奉仕ということが考えられてくるのである。愛とは、他者のために自己を制限することである。自己の自由もまた愛によって制限されねばならない。』（『聖書百話』北森嘉蔵）半九郎がほんとう

の意味での奉公に志すためには、桜田門での馬の口取り争いのことも、国表での主君への奉公一途も、ここまで立ち帰って考え直さねばならないものを含んでいるわけである。

以上のようなところをも含めて、忠善の解き明しの焦点には、いま一つの意味が含まれていると見なければならぬ。すなわち、『それだから、あなたがたに言っておく。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらつたからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかつた。きようは生えていて、あすは畑に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装つて下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言つて思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。』（マタイ六・25～34）<sup>註11</sup>

である。主君忠善の暗示的教示がいくら繰り返されても半九郎には自知・自覚が生まれなかつた。賺したり、教示したり、皮肉つたり、叱責したり、手を変え品を変えての忠善の導きにも拘らず、奉公の真実がわからないのである。第三章に入ったところで『お役御免』は、そういう事態の拳句の強い愛の鞭であつた筈である。だが、半九郎の自我の強さ、自己絶対の心は、この愛をも受けようとはしなかつた。それどころか、彼の自尊心が無惨にもへし折られたという感受であつた。しかし、人の力には限界がある。そのことを自覚しない人間はひたすら自己の力を過信して、自己を頼ろうとする。自己を頼るしかない者の心には、歡びは

取り去られて不安が生まれる。不安が嵩ずれば疑心暗鬼を生じ、人を疑うようになってくる。この心が、半九郎に『お役御免』は、誰かの『讒訴』によるものとの疑心を生ませたのである。しかし、如何に思いわずらおうとも、その人が己が寿命をほんの僅かでものばすことはできないと教えている。思いわずらひは本質的には、神への不信を意味している。神を父と呼ぶことを学んだ者の間に不信があつてはならない。神の愛を信じているが故に、思いわずらひをすることはできないのである。われわれは常に全力を尽さなければならぬ。それでも人間の力には限界がある。思いわずらひは勿論のこと、何の力も無い人間が無自覚に己に頼ることは危険極まりないことである。自己絶対観という神への背反が何よりも重大な罪であることの認識が大切である。すなわち、無力の人間のなすべきことは、神に信頼して、すべてを依存することである。聖句によれば、自然の背後にある恩恵を知り、その恩恵の背後にある愛に信頼せよ、なのである。半九郎が、主君忠善からあびせられた真の奉公の意味の解き明しを聞いて、「彼の全身を微塵に碎」かれたのである。

いかに主君の教示があつても、自己絶対の殻を脱け出せないで、真の奉公についての自覚に至ることのできなかつた半九郎に必要なことは、現在の所在から完全に突き離されることであつた。一切の解き明しを聞いた奉公、追放を命ぜられた半九郎は頑な身を打ち砕かれ、全く孤立無援の状態に突き離されたのである。いかに教示を与えられても、何らの自覚も持てなかつた半九郎が真実自己の無力を自覚したのはこの時である筈である。マタイによる福音書五に、『悲しんでいる人たちは、さいわいである』（マタイ五・４）といつてある。「人生の最大の悲しみを耐え抜いた人は、さいわいである」（パークレー）悲しみは「何にもまして人の情けをしみじみと感じさせる」（全前）と同時に、他人に深い思いやりを持つことになる。そして「神の慰めと憐みは何にもかえられないことを知らせる。悲しみのときに始めて人を知り、神を知る。……悲しみに会うとき、人は深いものをさぐり、もし悲しみを正しい態度で受けとめるなら、新しい力と美しさが魂に加えられる。」（全前）「自分の罪と自分の無価値を、絶望するほどに悲しむ者」こそ「この悲しみを通してのみ神を知る喜びを見出す」（全前）といつてあるとおりである。この自覚が、彼に「真実の奉公」が何であるかをほんとうに認識させることになつたのではなからうか。この自覚に立ち至つた時、依るべき力あるもの・神への依存を知る筈である。神にとらえられている筈である。半九郎の真実との出合いがあるわけである。

ここに第四章の（結）としての意義が盛り上つてくるのである。身をもって扉の隙を塞いで煙硝蔵への延焼・爆発を防いだ男が確認できないまま翌年十一月、忠善は霜の深い矢矧川堤で遠乗りの中に、その男こそ半九郎だと、光の閃くようにその名が思いうかんだのである。「蕭々たる十三年のとしつきを経て、ふたび主従の心はい寄つた」のである。この結末がこの作品の最高潮であるともいひわば主題の『真実の奉公』すなわち、『無償の奉仕』の総仕上げとなつてゐる。これこそ周五郎が聖書に依つた最大のテーマであつて、彼の他の作品のテーマとしての共通の意味も考えられるものでもある。イエスの山上の説教のところに十二分に教えられている。

すなわち、『しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろむ者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ、あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやり、あなたの上着を奪い取る者には下着をも拒むな。あなたに求める者には与えてやり、あなたの持ち物を奪う者からは取りもどそうとするな。人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄にならうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄にならうか。罪人でさえ、それくらいの事はしている。また返してもらつても借りたとして、仲間には貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。』（ルカ六・27〜36）

である。『敵を愛し、憎む者に親切にせよ』は、「他者に対して善をしようという、内発的な感情をあらわす。その意味では、相手の人間がどのような仕打ちにしようとも、相手の幸福をおもんばかってやまないということである。自分の利害をまげても、すんで相手の至福を配慮して生きていることである。」（パークレー）すなわち、『無償の奉仕』の謂である。「イエスは、自分にして欲しいと思ふことを他人にもせよ、という黄金律をわれわれに与えられた。」（全前）孔子が『己れの欲せざる所は人に施すなかれ』ということをいつているが、これは否定形である。「そのようなことをしないようにすることはさほど困難ではない。

しかし、自分にして欲しいと思うことを犠牲をいとわずにやりぬくことは、それとは全く異質のものである。」(全前)そして「自分をはかるものさしが隣人であってはならない。そのような比較によって自分を対等にするのはしごく容易なことだろう。自分をはかるものさしは、むしろ、神でなければならぬ。」(全前)「このようなキリスト者の行ないの根拠は何か。われわれを神に近づけると、それがその根拠である。……神の愛は、聖人も罪人も同じように包み込む愛である。敵に対してさえその幸福を願うようになるなら、そのときわれわれは真の神の子となるであろう。」(全前)と。

半九郎は、追放されてから十三年、真実の奉公が何であるかを知らされていたのである。偶々岡崎の火事で危く火を引くところであった煙硝蔵を身をもって塞ぐ目塗りの役割をして焼死、煙硝蔵の爆発を未然に防いだのであった。このことを、主君忠善は、寛文十一年十一月の霜のふかい朝、矢矧川の堤で、△それは、かつて同じ場所で、同じように霜の深い朝、忿怒の拳をあげて、半九郎の高頬を打ち、突き伏せ、半九郎の間違いを酷しく指摘し、真実の奉公を教え、追放を申し渡した、その場所△あの時の半九郎の平伏する姿を見たのである。忠善は、凍てた土を撫でながら半九郎に語りかけた。「涙が忠善の頬をながれ」「蕭々たる十三年のとしつきを経て、ふたたび主従の心はあい寄ったのである。」と結ぶのである。すなわち、どうしても真実の奉公の意味が自覚できないで、遂に追放された半九郎に、はじめて神との出会いが果され、彼の救いの完成にも等しい終幕が下ろされたのである。

注7 注4の末尾参照。「ガラテヤ六・1〜5」「重荷を負うこと」が、自己絶対観を去り、自己の無力を知ることの原動力としての自覚をもたらすとは、「霊的な生活をし、本当にキリスト者らしい生活をしようとしている人が犯す危険は、他人の罪を敵しく裁きがちになる……彼らは索漠として、非同情的である。……パウロは、……わたしたちが過ちや罪に陥っている人を見るときは、『神の恵みが与えられていなかったならば、わたしも陥っていたであろう』と言った方がよい、と述べている。……つぎに、パウロはうぬぼれを叱責している。わたしたちは、自分の達成したものを他人と比較するならば、その達成は極めて快いかもしれないが、それを理想と比較するときには、うぬぼれの理由になるものは何一つ見当らなくなる。」(「聖書註解シリーズ」バークレー)

注8 本文と同趣旨を、水谷昭夫氏は、「山本周五郎とキリスト教」という一文の中で、「『五瓣の椿』の世界」を「作品はきわめて厳正な形の中に保たれている。形のたしかさはまた構成のたしかさとなって、主題を明晰の中にもつ」と述べている。

注9 相手の気持を考えないで間違った親切をした例としてすぐ思い出されるのは、イエスがベタニヤのマルタとマリヤの家を訪問されたときのことである。(ルカ一〇・38〜42)にあるとおりである。すなわち、「イエスがここに立ち寄られたのは、十字架にかかる二・三日前のことであった。このときイエスは、しばらくでもくつろいで休み、胸苦しい緊張をほぐしたいと願っておられた。マルタはイエスを慕っていた。イエスは彼女にとって一番尊い客であった。そのため、彼女は最上の食事を用意しようとして、あちらこちら忙しく立ち働きの皿や鍋の音をカタカタ、ガタガタさせていた。この音は、張りつめたイエスの神経には耐えがたいものであったろう。イエスが望まれたのは、静かなひとときであったのである。マルタは親切にするつもりで実は非常に残酷なことをしてしまったのである。しかし、マリヤは、イエスの静かにしていたという気持を察した。

われわれはよく親切をしようとするが、その親切は自分の立場から見た親切で、相手にとっては迷惑な場合がある。もしわれわれが、相手の心の中にまで入ってゆこうと心がけるならば、親切をするばかりでなく、心にもない不親切をしないことになるので、二重の親切をすることになる。」(バークレー)

注10 「マタイ二三・27〜28」について。この光景は、「ユダヤの墓の多くは、路傍にあった。……過越祭の頃パレスチナの道には神殿に参拝する人たちがあふれたが、もしこの人たちが途中でけがれをうつされれば、過越祭に参加できなくなる。そこで参拝者が知らないで墓にふれてけがれをうつされないように、アダルの月には路傍の墓をみな白く塗った。

そこで春の日にパレスチナを旅行する人たちは日光に白く輝いている墓を見て、美しいとさえ思ったであろう。しかし、その内部には、骨と死体がいっぱいつまっています、それにふればけがれた。これこそ、パリサイ人の実体であるとイエスはいわれる。かれらの外見は非常に宗教的であるが、心の中は罪によってけがれ、くさっていると。

このことは今日でも起こっている。シェークスピアがいったように、顔に

微笑を浮かべている悪人がいる。頭をたれ、敬虔な足取りで歩き、手を重ねていかにも謙遜にみえても、人を罪人だといって軽蔑している人たちがいる。この人たちは謙遜を誇り、人々は謙遜な態度に感心するであろうと考えて歩いている。本当の善人は自分が善人であることを知らない。自分が善人だと思った瞬間に、外見上はどんなに立派に見えても、その徳が消えてしまうのである。」(バークレー)

注11 マタイ六・25〜34、のほかに、コリント一・二・1〜5、も同じような意を教えている。

・説教の主体は神自身である。そこでは人間的技巧は一切不要である。むしろさまたげである。(新約聖書略解)

・かかる愚かな弱い説教と伝道との目的は、ただ教会の信仰が人になく、これを超えて直接にただ神の力にのみ依らんがためである。(空前)

注12 聖書の真理は出会いとしての真理である。(キリスト教大辞典、教文館版)

〔おわりに〕

はじめに記したように、山本周五郎がその作品のために聖書を用いたであろうこと、しかもその聖書理解もある程度詳密さがあつたことも、まさにそのとおりである<sup>注13</sup>と考えられるのである。ただ『蕭々十三年』を発表の頃、聖書との関わり具合がどの程度であつたかは、疑問なしとしなかつたのである。が、『蕭々十三年』のみについては、半九郎という人間を神の前に引き出し、ひき据えて描いてあるということは、比較的容易に捉えられた。ところが、字面の上では、まさしくキリスト者であるとか、キリスト教に関わりをもちつつというようなことは、勿論ありえないし、描かれた事柄の時代的な面からもそのことがどのような形でも表面には表わされえない時と素材である。少なくとも近代以外でも切支丹禁制時代の表による素材によってキリスト教に関する作品を構成することは極めて困難であつた筈である。というよりも不可能の領域が殆んどであつた筈である。

そのことにも増して、絶対必要、不可欠の神・キリスト・聖霊が、作者においてはいかに思量せられ、どのように作品構成の中に組み込まれようとしたのか、聖書のことばが、作者の人間の信条乃至は作者の道德観・倫理観と化して、作品

の裏側に隠される形をとってしまったらいて、本当の福音の姿は行き方知れずになつていきかねないでいたらくである。聖書的精神をたどりながら決定的な神の姿が見えない半端な道筋を辿らなければならなかつた残念さが大きく残影となつている。

これは、作者が聖書を利用しつつも、キリスト者ではなかつたということによるのだと思われる。したがって、キリスト主義の存在不能の時代や人物<sup>注14</sup>をもって作品の構成を図ることになつてしまったのであるうかと思われるのであつて、決定的にこの山本周五郎の作品をキリスト教文学と呼べない理由がここにあると考えられる。

これはすなわち、表現されている時代や人物には、キリスト教的匂いは一切隠されてしまつていて、おそらく殆んど一般読者にとってはキリスト教的臭味は全く気付くことのできない形に仕上げられているのであつて、したがって、作者の意図は、聖書の精神が、神の心でない、作者の人間の倫理に変更されたものとして利用されているという形をとつていたのである。

それにも拘わらず、この『蕭々十三年』をはじめとして、山本周五郎の数多くの作品群には、聖書との関わりが比較的容易に認められるところには、やはり限りない魅力を感じさせられるものがあることは確かに、論を俟たないところである。以上

注13 木村久邁典氏が、その「人間山本周五郎」に、「一時期の山本さんは、聖書を読むことに多くの時間をあてた。山本さんは仏教徒でもなく、キリスト教徒でもなかつた。だが、かなり仏教書にも通じ、聖書を熟読した。門馬義久は新聞記者にしてキリスト教の職業牧師でもあつたという異色ジャーナリストだが、山本さんのツボツボを押えていく、勘のよい聖書の読み方には驚嘆したものである。」といつてある。結びの総括といえそうでもある。

注14 例えば、『蕭々十三年』の構成では、主人公天野半九郎が罪の人として神の前に置かれている形をとつて対して、この作品のテーマへの流れを辿ると、どうしても「神」の存在がオカシクなる。「キリスト教文学」では、「神」は飽くまでも神であつて、対する人間は善悪賢鈍様々である。ところが、『蕭々十三年』では、神の役がどうも水野監物忠善に設定されているといわざるをえない。水野忠善はいくら主君でも神ではありえない。このような設定が時代と登場人物がキリスト教文学としては打ち合わない。設

定に無理と齟齬が出てくるのである。従って、聖書の意志・精神がすべて裏に引っ込んで完全に表からは消えざるを得ないのである。勿論、周五郎の意志が、宗教に直接関わりのない弱い大衆にも直かに容易に受容されるものとしてその作品の構成を考えていたことが何よりの因であると思われるが、聖書理論としての信条が作者山本周五郎の思想に、周五郎の倫理観に変じて利用せられ、信仰における神のことばとしての聖書ではなくなっていたのである。このことは本文の頭書の部分にも述べたとおりである。

(昭和五十四年九月七日受理)